

農山村における耕種農業展開の条件

大分県下郷地区農業調査報告 ③

八 木 宏 典

(九州農業試験場)

YAGI, H.

The Possibility of future growth of Crop Cultivation
in the Village among the Hills.

—Agricultural Research in Simogo Region Prif. Oita. (3)—

1. 課題の設定

前段の鎌城開拓地酪農の分析に引き続いて、ここでは下郷地区を流れる山国川、金吉川、種山路川など各河川流域と山地斜面に立地する既存の農業集落に焦点をあてて、そこでの耕種農業のあり方なり問題点、今後の展開方向などを考察することを課題としている。

2. O集落における事例

下郷地区における平均的集落としてのO集落は、西向きの山間傾斜地に位置している。調査農家10戸の経営概況は表の通りである。

3. 下郷農協と山村における耕種農業の形成

下郷農協が進めている「母ちゃん達の足をくびる」ための野菜作りは、未だ自給菜園の域を脱したとは言いがたい。しかし、当初2戸であったO集落の下郷農協組合員も、「産直」の進展に伴い今では8戸にふえ、部落の雰囲気も微妙に変ってきている。30年代なかんずく35年以降の商品経済の急激な浸透の中で、「米と木炭」中心の自給的農業から「米としいたけ」など専業的商品生産農業へ転換できる農家は、ごく限られた山林所有上層農であった。山林もたない大部分の農民は山仕事と農業とのかけもちで、その日の生活を維持してきたのである。

「貧農層の農協」と組合長自らが語るように、下郷農協の販売活動はこうした農家層の小商品生産農業への転換と、同時に農業の落層化そのものに歯止めをかけるために模索され追求されてきたものである。もともと山村という地域の零細な生産基盤が農家をして多品目生産の方向に向わしめ、このことが「安全な食品づくり」と「産直」をこれまで発展させてきたともいえるのである。そしてこの「産直」が、山林なしでは脱落したであろう農家を不完全ながらも農業にとどめて地域の土地利用を維持せしめ、将来の展望につないでいる点は高く評価されねばならない。

しかし、下郷農協から出発した「産直」も4農協協同まで広げられてきた現段階では、農協の今後の対応も、地域農業の形成へと視点をおいた運営へと展開せざるをえないであろう。このためには野菜生産の技術問題、山間地における小土地改良の問題、山林・畑・水田の総合的利用の問題、そしてそのための資金問題等々克服すべき課題は多い。農協自らが展望している「生産組織輪環体制」の成立のためには、その担い手育成の問題ともからんで、未だ多くの難関が待ちかまえているといえる。

表 1 O 部 落 農 家 の 経 営 の 概 要

農家	兼業種類	家族員	う就業 者	経営耕地			山林 所有	所属農協		経営の形態
				田	畑	樹園		下郷	耶馬溪	
①	I	7人	4人	102 ^a	25 ^a	30 ^a	3 ^{ha}	△	○	米+しいたけ+和牛(山林)
②	I	6	3	75	25	8	0.8	○	○	米+しいたけ+野菜+和牛
③	I	6	3	72	20	8	6	○	○	米+しいたけ+和牛(山林)
④	II	7	4	53	25	7	0.6	○	○	米+しいたけ+野菜
⑤	II(自営)	7	4	56	15	30	60	○	○	(山林)+米+しいたけ+くり
⑥	I	4	3	55	10	16	0.4	○	○	米+しいたけ+野菜+(乳牛)
⑦	II	3	3	52	10	8	0.5	○	○	米+鶏卵
⑧	II	3	3	46	10	100	4	○	○	米+くり(山林)
⑨	II	4	4	36	15	—	1	○	○	米
⑩	(専)	1	1	14	5	—	3	○	○	米(山林)
平均	—	(4.8)	(3.2)	(56)	(16)	(21)	(7.9)	—	—	—

注) 1. 所属農協の○印はその農協への所属を示し、△印は販売のみを示す。

2. 経営形態の(山林)は、山林経営からの所得を年平均10万円以上見込めるものを示す。なお⑥農家は山林(自営)経営中心の農家である。